京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 3 年目）

１．研究課題

家族と愛の研究

Family and Love Studies

２．研究代表者氏名

冨山　一郎

TOMIYAMA, Ichiro

３．研究期間

2022 年 4 月-2025 年 3 月(3 年目)

４．研究目的

　コロナ禍での外出自粛により、夫婦間・親子間の不和・虐待や、一人親家庭の経済的困窮があらためて浮き彫りになったように、今日、「一対の親が子どもを献身的に養育する家庭」すなわち「核家族」を標準として行われる政策や事業は、多くの齟齬や歪みを生じさせている。女性の社会進出や、人々の性的指向の多様化、さらには人工的生殖の増加に伴い、家族の「形」は著しい変化を被りつつあるにもかかわらず、我が国の政策や立法が想定する家族の「イメージ」のほうは、「異性どうしの両親と子ども」という旧来のスタンダードに固執しつづけているのである。家族の実情とイメージのあいだのこうしたギャップは、たとえば夫婦別姓の法制化や、民法の嫡出推定規定の緩和をめぐる議論を停滞させ、ひいては、少子化や非婚化といった社会問題の遠因ともなっている。

　本研究班は、「家族」をとりまく法的、制度的、歴史的、社会文化的、医学的、思想的文脈を横断しつつ、また、他の国々や文化の実情に照らした比較研究を忘れることなく、このギャップを埋めるための新たな超域的パラダイムの確立を目指す。その際、本研究班では、その特色となりうるひとつの問題系をアプローチの導線に据える。「愛」（夫婦愛、家族愛、親子愛――とりわけ子の親にたいする愛）の問題系である。愛を媒介としてセクシュアリティと生殖および次世代育成を一体化させる「核家族」＝「愛の共同体」という価値観は、それを生み出し、それによって支えられることを望んだ西欧近代の社会構造や生産様式の変貌とともに、その実質的な役割を終えたようにみえる。にもかかわらず、それは夫婦別姓反対派の唱える「家族の絆」のような道徳的価値に姿を変えて、今日も生き存えている。その原動力は何であり、いかなる言説装置がそれを支えているのだろうか。これらの問題の解明は、件のギャップの解消を妨げる知的制止を解くことに資するものと思われる。

Conflicts among family members, spousal and child abuse, poverty among single-parent

households: these are all familiar family problems, but have been aggravated by the Covid-19 pandemic. Yet, we have not freed ourselves from the ideal of nuclear family, a group consisted of a heterosexual couple and their children, being united by a sense of intimacy and love. It is clear this ideal no longer reflect real family life, where more people are in non-heterosexual relationships, more women participate in labor force and more children are born with assisted reproductive technology. Family laws and policies in Japan, however, are based on a model of nuclear-family consisted of a working father, a housewife mother and their biological children, and therefore disseminate the ideal image and encourage the practice of nuclear-family, making it hard for married couples to have separate family names and civil codes regarding the legal status of a child born after divorce to be revised.

We aim at constructing new models for family that can accommodate diverse practice of family life across the globe, by bringing together legal, institutional, historical, socio-cultural, medical, philosophical insights and conducting comparative studies of family life in different cultures. What makes our project unique among the previous studies of family is our focus on "love"—love in a couple, love in the family, love between parents and children, and love of children for their parents. Perhaps, the vital role of nuclear-family, organized around its ability to integrate sexuality, reproduction and nurturing of next generations under the banner of "love," has come to an end. Nevertheless, it survives as a moral value in the name of "family bonds." It is, therefore, an urgent task to make visible driving forces behind and discursive operations through which the idea of nuclear-family continues to survive.

５．本年度の研究実施状況

本研究班の最終年度に当たる本年度は、全 11 回の例会を開催し、研究の裾野を広げるとともに、その内の 2 回で本研究班の今後の活動・展望について討議する時間を設け、本研究の締めくくり及びまとめに向けて、基本となる方針を設定した。例会のテーマは、家族（の一員）が取り組む政治運動によって家庭に政治が入り込むプロセスの歴史的検討から、介護保険制度の設計と問題点の経済学的分析まで、文芸作品に描かれる家族の「症状」の家族療法的把握から、韓国における家族政策の系譜の歴史社会学的整理まで、地方議会からみたジェンダー・家族の諸問題の政治学的論究から、ケア・ペナルティを課す家族主義の解体を模索する社会学的議論まで、さらには精神分析における家族愛の理論の考察まで、先立つ 2 年度同様多岐にわたり、「家族」という広大かつ複雑なテーマの設定そのものが異分野融合的コレクティヴワークを必然的に要求することが実感された。ここから生まれる成果を、今後 1 年間かけて、一冊の論集（『人文學報』特集号）にまとめる予定である。

６．本年度の研究実施内容

2024.4.20　「始まり」としての家族と愛、あるいは偽装された愛 発表者 冨山一郎　同志

社大学大学院グローバルスタディーズ研究科

2024.5.18 研究班の今後の計画／論集制作に向けて＋小報告 精神分析における愛の理論の基礎 発表者 立木康介

2024.6.15 日本の介護：介護保険制度・家族・市場 発表者 御子柴みなも 名古屋大学大学院経済学研究科 分配・再分配・労働編成 発表者 楡井誠 東京大学大学院経済学研究科

2024.7.20 韓国の家族のこれまでと現在：家族政策における「家族」の位置づけを中心に 発表者 新藤麻里 東京大学社会科学研究所

2024.9.21 “生まれらん生まれ（ンマリランンマリ）”——沖縄の少年少女の生きづらさとコミュニティ 発表者 片本恵利 沖縄国際大学総合文化学部

2024.10.19 杉並区議会に見る家族観とジェンダー 発表者 山名奏子 東京都杉並区議会

2024.11.16 フェデリコ・フェリーニ作品におけるキャンプと「愛」の問題 発表者 神田育也 京都大学大学院人間・環境学研究科

2024.12.21 『死の棘』の家族臨床 発表者 花田里欧子 東京女子大学現代教養学部

2025.1.25 家族主義と演繹型思考にもとづく政策の課題——子どもをめぐる政策を事例に—— 発表者 藤間公太 京都大学大学院教育学研究科

2025.2.15 精神分析的エローティクII 発表者 立木康介

2025.3.15 論集構想発表・検討会＋小報告 罰を受ける母たち——ケア・ペナルティと家族主義の解体に向けて 発表者 直野章子

７．共同研究会に関連した公表実績

なし

８．研究班員

所内

立木康介、直野章子、酒井朋子、藤原辰史

学内

木下千花(大学院人間・環境学研究科)、丸山里美(大学院文学研究科)、神田育也(大学院人間・環境学研究科)

学外

冨山一郎(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)、中井亜佐子(一橋大学大学院言語社会研究科)、楡井誠(東京大学大学院経済学研究科)、小門穂(大阪大学大学院文学研究科)、沈恬恬(東京大学社会科学研究所)、新藤麻里(東京大学社会科学研究所)、内田利広(龍谷大学文学部)、小川公代(上智大学外国語学部)、熊谷哲哉(近畿大学経営学部)、鈴木洋仁(神戸学院大学現代社会学部)、長瀬正子(佛教大学社会福祉学部)、花田里欧子(東京女子大学現代教養学部)、日高由貴(大阪城南女子短期大学総合保育学科)、菅野優香(同志社大学グローバル

スタディーズ研究科)、DISTEFANO, Anthony(カリフォルニア州立大学フラトン校)、神原文子(元神戸学院大学)

９．共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
人文研所属	1	5	0	0	0	0	32	0	0	0	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(10)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内（人文研を除く）	2	3	0	0	0	1	18	0	0	0	9
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(9)	(0)	(0)	(0)	(0)
国立大学	5	11	0	0	0	0	28	0	0	0	0
（内女性）		(8)	(0)	(0)	(0)	(0)	(26)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	7	10	0	0	0	0	45	0	0	0	0
（内女性）		(6)	(0)	(0)	(0)	(0)	(27)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他　※	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
（内女性）		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	16	30	0	0	0	1	124	0	0	0	9
		(19)	(0)	(0)	(0)	(0)	(73)	(0)	(0)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	3		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	9		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	G. Rousset et al. (dirs.) Concilier santé et droits fondamentaux en période de pandémie. Une analyse juridique des expériences de la France et du Japon, Bruylant	1	2024.4	La grossesse au Japon : Impact sur les soins périnataux et l'expérience des femmes	Minori KOKADO
2	精神分析的精神医学、14 号	1	2024.5	思考の没落、抑圧の消滅――アメンチア無意識の時代	立木康介
3	MFE＝多焦点拡張、5	1	2024.8	石と証（五）： Sinno, Triste tigre, P.O.L 2023 における「檻」を巡って	沈 恬恬

4	MFE＝多焦点拡張、5	1	2024.8	「いつ出られますか？」、あるいは黙々の認知	冨山一郎
5	年報医事法学、39 号	1	2024.9	日本における緊急避妊･中絶関連医薬品へのアクセス拡大	小門 穂
6	群像、2024 年 10 月号	1	2024.10	二個の者が same space ヲ occupy スル訳には行かぬ――濱口竜介の映画世界における時空間とモノガミー	木下千花
7	塚本昌則・鈴木雅雄編『〈現実〉論序説　フィクションとは何か？イメージとは何か？』水声社	1	2024.11	精神分析における「現実」――フロイト、ウィニコット、ラカン	立木康介
8	羽場久美子・中西優美子・田中素香編著『EU 百科事典』丸善出版	1	2024.12	ヨーロッパの生殖医療	小門 穂
9	東京女子大学心理臨床センター紀要、15	1	2024.12	島尾マヤへの家族臨床的接近(6)―マヤはいかに語られたか①―	花田里欧子
10	藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学――あらがい、書きとめ、待ちうける』岩波書店	1	2025.2	罰を受ける母親たち――コロナ禍が映し出すジェンダー不平等とケアの危機	直野章子
11	三菱経済研究所 経済研究書、 2025 巻 159 号	1	2025.2	異質的家計世代重複モデルによる日本の家計貯蓄率の分析	楡井 誠
12	待兼山論叢、58 号	1	2025.3	フランスにおける人工妊娠中絶の要件緩和	小門 穂

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 小学校編［第 3 版］	長谷川啓三，花田里欧子，佐藤宏平	2024.4	遠見書房	
2	事例で学ぶ生徒指導・進路指導・教育相談 中学校・高等学校編［第 4 版］	長谷川啓三，佐藤宏平，花田里欧子	2024.8	遠見書房	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

冨山一郎班長の本研究所客員教授としての任期（令和 4 年度～6 年度）に合わせて、本研究班の研究期間は今年度までとなるが、本研究班は来年度（令和 7 年度）も成果公表に向けた取り組みを進める。まず、5 月 10 日に人文研アカデミーの企画として、公開シンポジウム「中ピ連とは何だったか――榎美沙子とリブの 70 年代、そして私たちの時代」を開催し、日本の家族が抱える困難（少子化や、妊娠・出産・子育てをめぐる諸問題）の大きな要因であるジェンダー不平等と女性の生きづらさに光を当てる。次いで、本研究班の成果報告書となる論集を、本研究所紀要『人文學報』の特集号として編む作業にとりかかるが、同号は 11 月 30 日締切で原稿を募り、令和 8 年 3 月に刊行する予定である。